

「ことば」と過去性

ローゼンツヴァイクのシェリング解釈とハイデガー

鈴木 康則

ローゼンツヴァイクは、論考「新しい思考」においてシェリングの「諸世界時代 *Weltalter*」を引き合いに出しつつ、「物語る哲学」、言い換えれば「昔々～」と語る言語活動の重要性に着目した(MW3 149)¹。「物語ること」はローゼンツヴァイクにおいて、単に言語活動の一つというわけではない。むしろ人間にとっての「ことば」が「物語ること」から規定されるものであり、その際に特殊な意味での「過去性」を哲学はその考察対象にせねばならないとする発想を、ローゼンツヴァイクは提示しようとした。

今回の発表では、とりわけローゼンツヴァイクのこのような哲学的発想が現在においてもなお重要性を持つものであるという主張を提示し、吟味してみたい。さらに「過去」や「時間」、「物語」に対するまったく別の思考、すなわちハイデガーの思考のを比較材料とすることによって、ローゼンツヴァイクやシェリングの発想の内実がより精密に検討できるだろう。

「物語ること」において重要なのは、「本質」ではなく「経験された事実性」である。ローゼンツヴァイクは本質を問う思考を「古い思考」と呼び、「物語る哲学」、あるいは「経験する哲学」を「新しい思考」として位置づけ、自身が探求する哲学として提示した。「本質」のみを問題にする「古い思考」において、「時間」は問題とならない。「新しい思考」においては「本質」ではなく「経験された事実性」、つまり「時間」の契機を含意する要素が考察の対象となる²。「新しい思考」が着目するのは、「物語ること」が「他者からそのきっかけの言葉を与えられる」のを待ち、(無時間的「本質」には還元不能な)「時間」の契機が過ぎてから、ようやく始まるという点である。

ではローゼンツヴァイクが拠り所としたシェリングはどう考えたのか。「過ぎ去ったものは知られ、現在のなものは認識され、未来的なものは予感される。知られたものは物語られ、認識されたものは叙述され、予感されたものは予言される」³。「諸世界時代」(その主な三つの草稿の冒頭でのこの文言は全て同一

¹ *Der Mensch und sein Werk, Gesammelte Schriften 3*, Franz Rosenzweig, Martinus Nijhoff, 1979 (= MW3).

² 「新しい思考」が取り上げる論点のうち、「神」についての言及については今回立ち入ることができない。「神」はシェリング、ハイデガーにおいても問題となる重要な論点であるが、本発表の立場では「神」の問題に先立って、「物語ること」こそが考究されるべきものであると考えるからである。

³ 山口和子、『未完の物語』、149頁での訳文を用いたが、引用に際して一部変更を加えた。

である)はこの言葉でもって始まる。

ただし「知られたもの」や「過ぎ去ったもの」は、その内容が全て理解可能となったものとして手元にあるわけではない。人間は「過去」の内実を理解するべく探求せねばならない。「われわれが学と呼ぶものは、想起への努力のみ」(SW 8 201)⁴と考えるシェリングにとって、「物語ること」は「学」の方法であった。「物語ること」はこの場合、「問う存在と問われる存在」の間での「沈黙の対話 Gespräch」(SW 8 201)に由来する。だがこの「対話」の内実がどのようなものであるかを、さらに考えてみる必要があるだろう。

ローゼンツヴァイクは、「新しい思考」を「対話」として特徴づけた。「現実の対話では、何かが起こる」(MW3 151)。だがこの規定は、シェリングが「沈黙の対話」と呼んだ事態ではないはずである。むしろ、ハイデガーが良心論において論じた「沈黙」の方が適切ではないだろうか。

ハイデガーによれば、「自己対話」(SZ 273)⁵は「何も伝達せず」、「良心」は「沈黙という様態において語る」(SZ 274)。ハイデガーとローゼンツヴァイクの差異は、レーヴィットによれば「二人称」の扱いにある。ローゼンツヴァイクとは違い、ハイデガーは「他人」との「相互」関係を見出さず、「自分自身」に出会うのみであるというのがレーヴィットの分析である⁶。だがシェリングの言う「沈黙の対話」がローゼンツヴァイクよりもむしろハイデガーに近いとするならば、ローゼンツヴァイクの言う「対話」、すなわち「物語ること」が「他人」の現前としての「二人称」に尽きるかどうかをさらに究明する必要がある。

⁴ Friedrich Wilhelm Joseph von Schellings sämtliche Werke, hrsg. von Karl Friedrich August Schelling, Stuttgart, Cotta (= SW).

⁵ Heidegger, *Sein und Zeit*, Max Niemeyer, 1993(=SZ).

⁶ K. Löwith, "M. Heidegger und F. Rosenzweig. Ein Nachtrag zu Sein und Zeit", in: *Gesammelte Abhandlungen*, Kohlhammer, 1960, p. 76.